

「蒜山原農家の経営調査」から

農林省中国農試経営部 石垣 千代三

昨秋、県畜産課のAさんや酪農試験場分場のKさん方と一緒に、農林省畜産局の蒜山原農家の経営調査のお手伝いをした。その折の感想の断片を紙上を借りて少し申し上げてみたい。

調査した農家は酪農家や、そうでない農家もふくめて、経営上の事柄についていろいろ実状を聴かしてもらった。そのうちの一つ、農家の収入と支出について感じたことである。

常識的には、農家の現金収入は経営面積の広い農家が多く、そうでない農家は少ないと解されている。もちろんそれに相異はないが、そればかりとは限らない。というのは、経営面積が少し狭くても大農家をしのぐような収入をあげている農家も相当ある。だから収入の多寡を論ずる場合、経営面積の広狭のみが正確な指尺であるとはいえない。

そこで私は、家族の消費能力からみた消費単位当りの収入を計算してみた。その根拠は、農業経営をやって収入を増そうとするのは一つには、農家家族の衣食住について生活水準を少しでも高めようとする意欲にもとづくと考えからである。消費能力算出には性と年齢とを勘案した内閣統計局使用のものによった。

一方、別に現金収入総額に対する畜産収入の比率を計算した。このことは総収入中に占める畜産部門の比重の大小を判別するためである。

さて、この消費単位当り収入額(円)を縦軸に、畜産部門の収入比重(%)を横軸に方眼紙上にとって各農家ごとの数字を点でおとしてみた。

どんなことがわかったであろうか？

まず、消費単位当り収入の高額な農家はほとんどが、畜産部門の収入の比重の高い農家であるということである。(これをA群農家と呼ぶことにする。)注釈しておくが、これは経営面積の広狭にあまりかわりはなく、これはたしかに愉快的なことだ。つまり、農家の

収入を増大しようとするならば、まずもって畜産部門からの収入比重を増せばよいということができそうだからである。

(もっと確かなことを知ろうとするならば、両者間の相関係数や回帰係数を算出してみればよい)とにかく、畜産部門の収入の比重が大きいことは総収入増大の一つの基本条件であると言ってよいようである。

次に、もう一つ考えさせられたことがある。それは、畜産収入だけが収入を増大させる唯一の立役者ではないという論が出るにちがいないことである。正にその通りで、人間の欲には限りがない、畜産収入の他に収入が得られるものがあるならばその方でももうけてやろうという気持は、農家だって人間である以上あるはずである。現に私どもが調査した農家の中にも畜産以外の他のもの(キャベツ、たばこなど)から収入をあげている。いや、畜産よりも他の収入に重点をおいている農家も少なくないのである。

ところで、調査農家をしらみつぶしにつついてみると、畜産収入以外の収入に飛びつく農家とあまり見向きもしない農家とがあることがわかったのである。

まず見向きしない農家であるが、これには全然見向きをしようとししない農家と見向きはしたいのだが他の都合でできない農家と2種類あるようである。全然見向きしようとししない農家は収入にまずまず不足はないからこれ以上アクセクして肉体を酷使しなくともよい……といったように見える農家で、もう一つの見向きしたくてもできない農家は人手、つまり労力が不足だから現状以上の収入源に手を出すことができない、当分現状維持を決め込んでいるような農家である。

このように理由はともあれ、見向きをしない農家は一体どんな農家に多いかというと、さきに述べたA群の農家に多い。そのことはまずまず肯定できるとして、

岡山畜産便り1960.03

もう一つ、A群の正反対の、すなわち消費単位当り収入も畜産部門の収入の比重もともに低い群にあることである。(これをC、D群と呼ぶ) このことも興味をそそることである。何故にC、D群に他の商品作物収入に見向きをしない農家があらわれるのだろうか? 想像するのにC、D群、特にD群は経営面積もA群に比較して狭いし、資力も乏しい、米麦収入は別として畜産収入はホンのチョップリだけ、いきおい兼業収入に飛びつく方が手っ取り早い。だから同じく見向きをしないといてもA群のそれとはちがうことがわかる。

次に、商品作物収入に飛びついている農家はどんな農家だろうか? まず、労力に余裕のある農家であることは前に述べたところから充分に肯けることであるが、その他に必須条件として畑地に余裕があることである。その点ではB群とM群が条件が備わっている。

事実、この両群にはA群やC、D群よりも商品作に重点をおく農家が多いのである。

さて、B群が新たに登場して来たが、この群はA群と同様な経営規模を持っているが、酪農化の程度がA群よりも低いというだけの差である。ただそれだけで畜産収入の比重も消費単位当りの収入もA群よりはズッと低く、方眼紙上にあらわれる位置はA群とC、D群の間にある。この群に属する農家は程度に差はあるが全農家が畜産収入の他に商品作物収入を採り入れているのである。程度の差とは矢張り労力の過不足に原因があるようである。

最後に、M群は開拓農家の酪農家群である。この群の農家は畜産収入の比重はA群をしのぐ程高いが、消費単位当り所得ではそれに及ばぬものが多い。(B群よりも下廻る) 元来米麦という生活必需品の生産部門を持たず、購入にまたなければならないためそれに要する資金を他の部門からの現金収入で確保しなければならないという特別事情がある。必然的に畜産収入を含めてあらゆる商品部門の収入を最大限度まで採り入れなければならない。だから一見投機的と思われ

る程まで商品生産を行なっている。やがてもし、この収入が蓄積されて経営施設や装備にふり向けられた場合、M群から安定性の高いA群への飛躍を期待することができよう。現にその実例もこの群の中に見出すことができる。

以上、私が拙い筆で書き綴ったことを要約すると、A群農家は最も安定したグループで高い畜産収入の比重という特色を有し、C、D群はその正反対、B群はその中間にあつてそのうちのある農家はA群に接近するだろうが、そうでない農家はC、D群に近い混迷をつづけるだろう。M群は優秀なものはA群をしりえにどうじゃくたらしめるが、そうでないものはC、D群以下の水準に彷徨しなければならない。最後に一言つけ加えて今まで触れなかった穴を埋めておきたい。これまで何回か労力不足ということを行ったが、農家はこれをどういうふう処置しているだろうか? A類型では既に和牛を乳牛に転換し、しかも頭数を増加して畜産収入に重点をおき、一方、動力耕耘機を装備して労働の代替を行なっているのに較べて、B類型は経営耕地面積の点ではA類型と変りはないのに、たばこ収入に執着して労力の大半をそれに投じているので乳牛頭数を増す段階まで行かない、この類型では動力耕耘機を所有している者が少ないのがA類型と対照的である。BからAへ飛躍できるか否かという鍵が案外この辺にあるのかも知れないと考えるのは筆者だけだろうか?